



雨の日のおともに



おすすめのアルバム

雨が多くなる時期になりましたね。雨の日はなんとなく気分が落ち込んでしまう、何のやる気も起きない……そんな人も多いのではないのでしょうか。外に出るのが億劫で家に籠もっている日や、びしょ濡れになりながらも大学に行かなくてはならない日は、音楽をおともに過ごしてみると、少し気分が上がるかもしれません。そこで今回は、わたしが雨の日に聴きたくなる音楽アルバムを3枚ご紹介します。雨の日を音楽とともに過ごしてみませんか？（モアイ）



藤原さくら 「SUPERMARKET」



SPEEDSTAR RECORDS
2020.10.21 Release
全13曲収録

『SUPERMARKET』は藤原さくらの3枚目のアルバムである。藤原は俳優としても活躍しているので、ドラマなどで彼女を知ったという方も多いかもしれない。俳優としての彼女しか知らないという方も、是非本作を聴いてほしい。

このアルバムは、それぞれが異なる色を持つ曲が揃った、まさしくスーパーマーケットのような作品である。だが、そんな多彩なアルバムの中でも共通しているのは、どこか哀愁を帯びつつ、じんわりと心の奥から温めてくれるような心地よい温度感だ。その温度感を生み出している要素のひとつは、藤原の持つ歌声であると思う。彼女の歌声は、低くハスキーなスモーキーボイスだ。聴く者を惹きつける憂いと、包み込むような温かさの両方を併せ持っており、無二の魅力を放っている。

そして、このアルバムに通底する落ち着いた温度感は、彼女の書く歌詞からも感じられる。人は誰しも、うまくいかないことの多い毎日を、寂しさや虚しさ、やるせなさといった思いを抱えながら生きている。この作品の歌詞は、そんなやりきれない感情も、淡々と飾ることなく表現している。彼女とは違う場所で違う日々を生きているのに、まるでずっと隣を歩いているかのような気持ちになるのだ。そんな聴く者の日常に寄り添ったこのアルバムは、聴いているうちにささやかな前向きさがぼっと自分の中に生まれているような、さりげない優しさを持った作品であると思う。

たとえ雨が降っている日でも、このアルバムを聴きながら過ごしてみれば、いつも通る道に小さな花を見つけたときのように、日常が少し違って見えるかもしれない。



サカナクション 「kikUUiki」



VICTOR ENTERTAINMENT
2010.03.17 Release
全 12 曲収録
(初回限定版のみ全 13 曲)

『新宝島』をはじめとする多くのヒット曲を持ち、高い人気を誇りながら、曲作りはもちろん、MVやライブ演出などにおいても常に新しい表現を模索しているバンド・サカナクションが、2010年に発表したアルバム『kikUUiki』。タイトルにある「汽空域（きくういき）」とは、淡水と海水が混じり合う水域を意味する語「汽水域」を基に作られた造語である。このタイトルは一体何を表しているのだろうか。今回は、本作の歌詞に注目して考えてみたい。

サカナクションのほとんどの楽曲の作詞作曲を手がけている山口一郎は、歌詞作りに並々ならぬ労力と時間をかけ、完成までに幾度となく推敲を重ねるという。音楽や自分自身にどこまでも正直で真摯なその姿勢が、彼の詞には表れている。サカナクションの詞には「夜」という単語が非常に多く

登場するが、夜はまさに淡水と海水のように、今日と明日が混じり合った狭間の時間であると思う。光の少ない暗がりの中で、これまでとこれからを考えること、自分と向き合うことを促される時間だ。サカナクションの詞に「夜」が多いのは、山口がそんな時間を大切にし、自分の心に潜っていくかのように深く自分自身を見つめているからではないだろうか。このアルバムでも、苦悩しながらも変わろうと心が、こぼれ落ちないように丁寧に描かれている。いろいろなもの混じり合い揺れ動く、曖昧で過渡的な状態を、無理に分類することなく、混じり合ったものとしてそのまま認めて表現する。そこに、本作のタイトルと通じるものがあると思う。

気が塞ぎがちになってしまう梅雨。このアルバムは、そんな日々を乗り越えおともになってくれるはずだ。



中村佳穂 「AINOU」



AINOU
2018.11.07 Release
全 12 曲収録

2021年に公開された映画『竜とそばかすの姫』で、主人公すず・ベル役の声優と劇中歌を担当した中村佳穂。同映画ではその表現力と歌唱力にただただ圧倒されたが、今回取り上げるアルバム『AINOU』には、ベルとはまた違う「中村佳穂」の音楽の魅力が詰まっている。

中村佳穂のプロフィールには「音楽その物の様な存在」というフレーズがよく登場するが、このアルバムを聴いていると、その表現はまさに言い得て妙だと感じる。AメロやBメロ、サビといったよくある構成にはとらわれず、リズムは自在に跳ね、歌声は多彩な色を見せる。聴く者の予想を軽やかに超えていき、曲に散りばめられたさまざまな音を追っているうちにいつのまにか夢中になってしまう。彼女は音楽を、「音楽」という文字が表す通り、楽しみながら自由自在に生み出して

いるのだと思う。

そして、彼女の曲からは、それを生み出した中村佳穂という人をまっすぐ感じる。心の奥にずっと入ってくるような、優しく強い声。そのとき感じたことをそのまま呟いているような、語りかけているような歌。音、言葉、歌、その全てで、自分の心をありのまま表現し、伝えていると感じるのだ。だから中村佳穂の音楽は聴く者にまっすぐ深く届き、心を動かす。まるで神聖な祈りのようだ。これも、彼女が「音楽その物」と評される所以ではないだろうか。

どこか憂鬱な雨の日でも、自由に心に響くこの作品は、わたしたちを日常から少し離れたところに連れ出してくれるだろう。

はみだし
すてーじ

2回生になって初めて投稿します。よろしくお願ひします。
⇒嬉しいです!! これからもどしどし投稿してくださいね。

(農・2 funa)
(こちらこそよろしくお願ひします;編)